
風のグラスゴー 風雲編

玲於奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風のグラスゴー 風雲編

【Nコード】

N9382Z

【作者名】

玲於奈

【あらすじ】

この小説は、前作「風のグラスゴー」の続編です。いよいよ大学生活の大海原を漕ぎ出した主人公が、外国留学に向けてもがき、そして日本を旅立ちます。先が長い話ともなりますが、どうか日々こ愛読いただき応援よろしくお願い致します。

第一話 新聞広告（前書き）

前作「風のグラスゴー」は、著者の処女作でもあり、日々の自転車操業での物語で、読みづらいところなどありご迷惑をおかけしました。

しかしながらその日々の執筆の中で書きながら学んだこと、周りの皆さまから教えていただいたことがたくさんあります。主にパソコン操作面での様々な情報提供ありがとうございました。この新しい風雲編から、いよいよ外国に向けて始動します。先が長いことが予想もされますが、ご愛読どうかよろしくお願い致します。

第一話 新聞広告

何か新しいことをする時に
絶対反対する

あなたは違いますか？

一歩一歩 努力する人を
神様はぜっ たいに見捨てません。

自分を信じて一歩を踏みだそう。

太い白いゴシック

その後ろに細面の美女が笑っている。

前に座るサラリーマンが開く新聞の
一面広告。

それがなんだか痛烈に
自分を批判している。

そんな氣を感じる。

サラリーマン、全く動かない
どこか他の記事を読んでいるのだろう。

見た文字がフラッシュバックする。
文字が頭をまわる。

誰が訴えているのか？

頭を振って自問する。

今日は行けるのか？

やはり陸路でなければだめか？

科学の進歩も経済活動には勝てない。

訃報の連絡があって駆けつけた羽田

ゴールデンウィークのまっただ中

5月2日、日曜日。

混まないわけがない。

第一話 新聞広告（後書き）

皆さまのおかげをもちまして、新しい風雲編をスタートできたこと
ありがたく思います。前作「風のグラスゴー」は何度も挫折し、く
じけそうになりました。しかしながら、ここまでこれたこと本当に
ほっとしております。

ご縁ありまして年の終わりに、そして新しい年に向けて、新編をス
タートできたこと幸せに思います。最後になりますが、勝手ながら
もしよろしければ前作「風のグラスゴー」も読んで頂けますと風雲
編の助けになるのではと自負しております。よろしくご愛読くださ
い。

福沢諭吉 5枚（前書き）

なし

福沢諭吉 5枚

私は大学で新しくできた友人たちと遊んでいた。

場所は、幕張。人はそこを夢の国とよぶ。私たちは、人混みをものともせずアトラクションに参加し、乗り物に乗った。

訃報が入ったのは午後2時。母からであった。

沈黙、いや静寂があたりを包み

その後、すさまじい突風が私を襲った一瞬、何も考えることはできなかったまわりの色を失った

世界がモノクロになる。そう聞く。

まさにそうであった。

そして、始終ゴーという音が周りを突き抜けていつていた。

私の青ざめた顔に友人歴2ヶ月（合宿での共同生活歴4日）の深谷博がすぐに反応。

事情を聞いて、すぐ5万円を貸してくれた。金、持つてる奴だと思っていたが、

「純、こづかいは必要な時に、必要なだけ、だから氣にするな。」

言い方がキザなのか、生まれつきなのか
わからない。

「シラツと言うな。シラツと。じゃあな。」

私は、博を軽くパンチしてやるが、悪意はない。
パンチは空を切る。

それこそ感謝である。
少し自分を取り戻せた。

すぐに人混みに走り出す。
200m行っただくらいで振り返る、
そして、片手で博を拝む。

残された3人は
何事もなかったかのように
すぐに人混みに消えた。

福沢諭吉 5枚（後書き）

なし

羽田空港 チケットカウンター（前書き）

なし

羽田空港 チケットカウンター

羽田に向かう電車の中で
なんで、どうして？

？が回り出してとまらない。

死因は何だったんだろう。

あんな健康そうなおじさんが・・・

しかしながら

それは電話で聞くのは憚られ

おじ 吉岡 健 38歳

東京の国立大を卒業後、

大手玩具メーカー入社。

その後、飛躍的に伸びるデジタル部門に

配属。そして期待に応え、ヒットを飛ばす。

5年前に退職。

札幌市で友人とコンピューター会社を始める。

最近、やっと軌道にのり。

これからという時であった。

「純、大丈夫。

通夜は明日。お葬式はあさつて。

私たちは、羽田から行かないで、

F空港の最終便で行くからね。

あんたも後で必ず来なさいね。」

母の声がふりそそぐ。

ついさっきのことのように、
リフレインされる。

神様は憎いことをする。

人がこれからという時に
試すように試練を用意する。

おじさん

無念だったんじゃないだろうか。

思わず泣きそうになり、
電車の床を見る。

空港に着くと

予想通りたくさんの人で
ごった返していた。

泳ぎながらチケットカウンターに
表示板も満席だらけだが
重ねて札幌行きを丁重にたずねる。
すばやくグランドホステス

目で笑って

口もとに笑みを浮かべる

羽田空港 チケットカウンター（後書き）

なし

無情の判決（前書き）

なし

無情の判決

「お調べします。」

グランドホステスは
すばやく端末を操り、

「本日はすでに満席で、よろしければ
キャンセル待ちいたしましょうか？」

黙ってうなづく。

「お手続きしますが、ALAのカードは
お持ちでないですか？」

言われて財布を引つ張り出す。

母が勝手につくった銀のカードが飛び出す。
翼が描かれているカードをスキャン。

「吉岡 純さまですね。」

「大変申し訳ありませんが、今日の
混み具合ですと、もしやキャンセル待ち
いただいてもご搭乗できない場合がありますが
いかがなさいますか？」

「待ちます。」

なぜかそう言えなかった。

もごもごと

「どうしても札幌に行きたいのですが
いつなら乗れますか。」

必死の想いで聞く。

これはあくまでも私の経験じょうですがと、前置きされ、朝一番の便は、キャンセルがままあり、ご搭乗できるかもしれません。とのこと。

どうしていいかわからなかった。

グランドの方は、カチャカチャ端末を検索。その間もわからなかった。

どうやらNALも調べてくれたらしい。

「札幌行きはどの航空会社も満席です。」

無情の判決であった。

無情の判決（後書き）

なし

運命の時（前書き）

なし

運命の時

明日早朝の便に賭けることにした。
テキパキと手続きをとる空港職員を
背中に

私は空港がグレーに変わっていくのを
ぼんやりと見ていた。

あとで、聞けば
東京のほかのおじは、
新幹線で盛岡まで行き、
そこから、夜行寝台に
飛び乗ったらしい。

自分には機転がなかった。

私は一人空港を後にし、
家に戻った。

何度か電話をかけようと
思ったができなかった。

死に直面するのがこわかったのかも
しれない。

あるいは、逃げていたのかもしれない。
一睡もできなかった。

ピンポンパンポン。

「札幌行き601便　ご搭乗手続きの
お済み方は、至急検査場までお進みください。
繰り返します。」

札幌行き601便　ご搭乗手続きの
お済み方は、至急検査場までお進みください。」

今、目の前には
一歩一歩努力する人は
神様はぜっ　たいに見捨てません。

その強い文字が、
ここで乗れなければ

祈るような気持ちで呼び出しを待つ。

「札幌行き601便
キャンセルをお待ちの吉岡様。
至急チケットカウンターまでお越しください。」

ついにやった。
神様は見捨てなかった。
そう思った。

運命の時（後書き）

なし

デザイン部門にクレーム（前書き）

なし

デザイン部門にクレーム

搭乗待合室は

大勢の人だった。

驚くのはゴールデンウィーク

真っ最中というのに

ビジネスマンの

多いこと、多いこと。

7割 スーツ組。

3割 観光組。

搭乗前に並んでいる人も
いる。

時間との闘い。

タイムイズマネー。

さすがに

戦う日本の戦士達。

特撮スーパーヒーローと

たぶらせ、苦笑い。

列に並ぶために

席を立ったビジネスマンの

やっと空いた一席に座る。

後ろから

若手サラリーマン2人

ぼやいている。

テレビ会議でいいんじゃない。

うちら行く意味ってあんの。

かなり高飛車。

同僚も同意し、うちらが行く必要はない、ぶつぶつ・・・

社章は見えないが。

うちの会社の デザインが
悪すぎ。

うとのデザイン部門にクレーム

殺到は必死。

それで製品が動かないんじゃないやぶつぶつ。
相当たまっているようだ。

かたやその向こうでは、

おばあちゃんがせんべいの

おかきを食べている。

みかんを食べている。

おいおい。

平和だ。流れる時間が違う。

デザイン部門にクレーム（後書き）

なし

柳沢慎吾（前書き）

なし

柳沢慎吾

私は、できるだけ周りのことを見て
自分が鬱にならないように、
ならないように暗示をかける。

斜め脇の人は、葬儀社の香典返しの
紙バッグ。

口数も少なく。頭が下がっていることが
多い。

目を遠くに移す。

遠くの廊下を

薄化粧の背が高いアテンダント

小走りでやってくる

A3幅の黄色いバックを持っている

そしてすぐに

機内と連絡を取る。

掃除の終了を確認しているのだろう。

それにしても

黒い四角のトランシーバーで連絡。

ああ、こんな時なのに

柳沢慎吾のタバコの

警察無線を思い出す。

誰も何も思わないのか!!!

「まもなくA L A 6 0 1 便札幌行き

ご搭乗を開始致します・・・」

思い出さない、思い出さない

つぶやきながら

別なこと、別なこと。

見るように、観察するように
列に並ぶ。

少しでも頭が

脳が死をイメージしないように。

やぶれかぶれでスタンドで

ビールを飲もうかと思っただが

朝6時のビールもどうかかと思いとどまる。

柳沢慎吾（後書き）

なし

桑田佳祐の寂しげな曲（前書き）

なし

桑田佳祐の寂しげな曲

機内に入る

通路は渋滞している。

遙か先では優先登場の家族連れが
席にはいるために苦戦している。

席につくとすぐ

スチュワーデスが座席ベルトの確認
手荷物入れの安全確認をしている。

自然な無駄のない動き。

彼女らも定時出発を目指し、
時間との闘い。

続けて脱出説明。

そついう私に余裕はない。

本当に飛べるのか。

大丈夫なのか???

ごごこんという音がして

エンジンが回転

牽引していた背の低い

ひらべったいトラックが離れるのが

窓から見てわかる

離陸が怖くなつて

ヘッドホンをする

桑田佳祐がさびしげな曲を
歌っている

窓の外では

整備員が頭をさげ

手を振る

もう帰ってこれないのか

笑顔が氣になる

グッドラックのサイン

木村拓哉か！！！！

桑田佳祐の寂しげな曲（後書き）

なし

ポケモンジェット（前書き）

なし

ポケモンジェット

そうこうしているうちに
右に左にまがって
滑走路へ向かうようだ
ターミナルにはたくさんの
飛行機が駐機している
ポケモンジェットもある
太陽光が窓を
いったりきたりする

車輪で走っているのか
はやい
飛び跳ねるように
走行している
しばらくすると
とうとうはじまで
来てしまった
紫に赤の照明灯が
滑走路ぞいに
無言である

ポーン
無機質な音が鳴る
「当機はまもなく離陸します・・・」
やわらかい女性の声だが
心臓の鼓動は
はやくなる

飛ぶのかと思う間もなく

すごいGがかかる

はやい

ゆれる

飛び立つ

ふわっとした感じ

旋回

どんどん上昇する

窓から東京の街が見える

海が見える

旋回して海へ

ポケモンジェット（後書き）

なし

夏の1日(前書き)

なし

夏の1日

飛行場が小さい

あんなに長かった

滑走路。

遙かに、見える。

そして、

突然に

白い雲に突入。

無音

ミンミンミン。

静寂。

飛び立つ

家の庭

門脇の木に

いたのだろう

小学生が

騒いでいる

「明日、おじさん来るんでしょう」

「何時頃くるのかなあ」

「さあさあ、何時になるでしょうねえ」

アイロンをかけながら

若い母親が

応えている

「ねえ、おじさん

何か買ってきてくれるかなあ」

男の子が

母親の背中に
もたれながら、

母と息子の会話が

蝉のこえの中

続いている。

視点が変わる。

8月の

強烈な熱線。

そして

雄大な山裾

パラグライダーに

乗っているかのよう。

鳥の視線。

夏の1日(後書き)

なし

赤のコンバーチブル（前書き）

なし

赤のコンバーチブル

その山を縫うようにして
走る道路。

赤いコンバーチブル、
ものすごいスピードで
疾走。

駐車スペースのある
ゆったりした展望台に
入って止まる。

車から先ほどの小学生
そして

もう一人

背の高い

神経質気味な

眼鏡の男が

スラツと降り立つ。

「おじさん、この車

速ええええ。」

スピードに酔って

興奮している。

「なんの、なんの」

外見とはまったく違う。

愛想のよい話し方。

背伸びをしながら

「いやあ、空気がうまい。」

東京とは違う。」

明るい声だ、

「おーい、純。」

見てみるよ。

湖。でかいぜ。」

男は、聞いているのか

聞いていないのか

かまわずに話している。

赤のコンバーチブル（後書き）

なし

先のみえない世界（前書き）

なし

先のみえない世界

見渡せば

山裾

その下に

広がる田んぼ。

その彼方には

湖が

山々に囲まれ光っている。

男の子は

景色でなく

真つ赤な車を見つめ

「すごーい。」

おじさん、

オープンカーも

できるんだあ。」

幌を見つける。

「ああ、できるとも。」

「すごいなあ。」

感嘆。

はっとした

目が覚める。

夢。

背中が冷たい

窓から

青い空

濃い青。

宇宙。

空がどこまでも

続いている。

ここは

どこ？

どこにいるのか

わからない。

そうか、

雲上。

もしや天国。

・・・

案外、

こういうところか。

行ったことのない世界。

先のみえない世界。

先のみえない世界（後書き）

ここで、本年の掲載を終わります。
良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9382z/>

風のグラスゴー 風雲編

2011年12月31日20時49分発行